

## キリスト教教育と私 (8)

塩野和夫

### 8

#### (1)

1972(昭和47)年4月、同志社大学経済学部の2年生になった。立て看板が乱立したキャンパスは入学当時と何も変わっていなかった。ところが、殺伐とした校内で久しぶりに会おう同級生の声はみんな明るかった。私たちはこの1年間、学生運動から様々に刺激されてきた。学友会(新左翼系)に心情的に同調する者もいた。民青(共産党系)を支持する友達はそれよりも多くいた。さらに多かったのは、学生運動とは関わりを持たないが喫茶店に入ると時を忘れて議論する仲間だった。みんな真剣に何かを考えていた。いずれにしても、正常には機能していない大学で2年生はすでに1年間に過ごしてきた。だから、このような状況にあっても青春を謳歌するすべをそれぞれに心得ていた。そして、久しぶりに会う仲間と交わす声は自ずと弾んでいた。

そんなキャンパスの片隅で、「元氣やったか?!」と声をかけてきたのはOSである。彼とは基礎演習で同じ中国経済をとっていた。がっしりした体格のOSは声にも力がこもっていた。ところが、演習の申し込みに関する彼の悩みはとても繊細で現実的なものだった。

OS 塩野は演習の申し込みをどうするか、考えたか?

塩野 中国経済の鳥ゼミにする。OSも鳥ゼミやろ。

OS それがどうしたものかと悩んでいるんや。

塩野 基礎演習も鳥ゼミで問題はなかった。中国経済に興味を持ってるんやったら、鳥ゼミだろう?

OS おカンがな、心配やと言うんや!

塩野 何が心配なんや？

OS 中国経済を勉強してたら、就職に差し障りが出るんやないかと心配するんや。

塩野 お母さんが、そんな心配されるんか。OS も大変やな！

OS おカンの心配も分かる。演習の申し込みのこと、もう一度よく考えてみる。

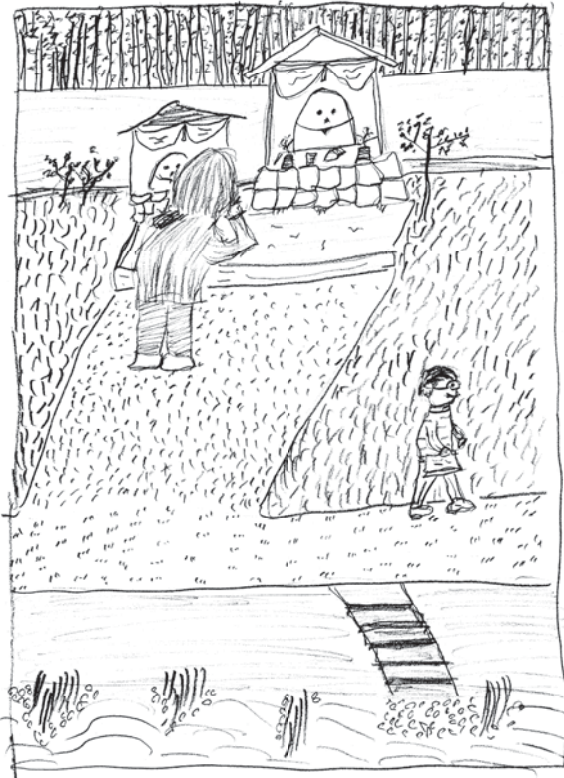
塩野、またな。

ふっきれたように、OS の別れの挨拶は明るかった。

\*

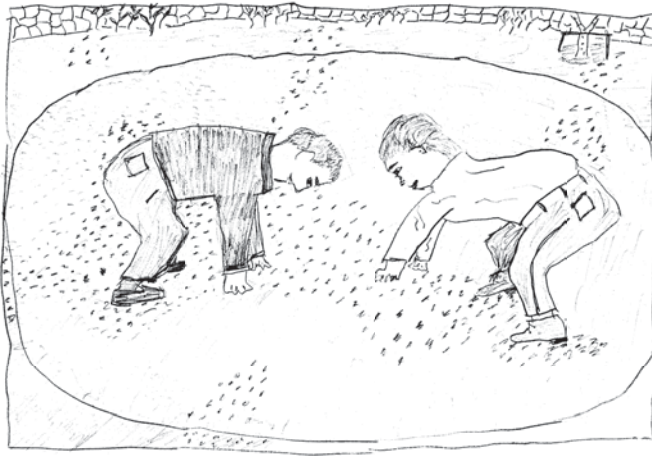
2年生になった春に心を動かされたことが2つあった。ひとつは二条大橋の下で生活していたあのおっちゃんである。彼は1972年の春になると、パンを届ける学生を待つようになっていた。そして、パンを受けると決まって不器用に頭を下げ、ほそほそと何かつぶやいていた。それから週に一度か二度、鴨川に沿った狭い川渕の道と一緒に歩くようになった。何枚もの服を重ね着しているおっちゃんはすり足気味に歩いていた。挨拶以外に交わす言葉のない大学生はつかず離れずに歩き、丸太町大橋をくぐり荒神口橋の近くに来る。すると、おっちゃんは川渕の道から土手の方に向き直り、土手近くにあるお地藏さんの前へ進んでいくのであった。それからしばらくの時をお地藏さんの前で手を合わせ頭を下げていた。初めてその光景に出会った大学生には、それは予想もしない意外な出来事だった。そもそもそこにあるお地藏さんの存在に彼は気付いていなかった。しかし、2回3回と重ねるうちに隠されているおっちゃんの内面、誰にも話さない彼の内面に触れているように思えて、心を動かされたのである。また、お地藏さんの前で手を合わせ、頭を下げている光景に何か神聖なものを感じた。それで大学生は川渕の道でおっちゃんとは別れて、荒神口から西に向かい御所を経由して同志社大学へ行った。

もうひとつはKMである。3月に高校生と青年会有志が合同で1日修養会を行った。15名ほどの参加者がいた。場所は高槻市の山中にある神峰山寺である。この修養会にKMが参加したのである。つい半年前までは、誰かに付き添ってもらわないと彼の足もとはおぼつかなかった。それにその頃、彼は教会にも来ていなかった。ただ、おりおりKMのお宅に立ち寄り、おやつをいただきながらいろいろな話をしていた。話の中でごく自然と、香里教会のこと、教会の青年会のこと、春の修養会のこと



お地藏さんに手を合わせるおっちゃん

が話題になった。するとなぜか、KMは春の修養会に強い関心を示した。お母さんも細かくその内容について聞かれた。そして、お母さんの了解を得てKMは修養会に参加した。当日の朝、香里教会に集合した参加者でただ一人KMだけが帽子をかぶっていた。ところで驚いたことに、神峰山寺について帽子を取ると彼の頭はきれいに整えられていた。若者が散髪に行かず、長髪が流行していた時代である。KMの頭は目立った。みんなはKMを気づかって、何かと声をかけていた。彼はぼそぼそと返事していて、まんざらでもない様子だった。ただ、礼拝や講演の内容にはついていけず退屈しているように見えた。そんなKMが、小石の混じった広場で2日目の朝の集会を終えた時に、突然話しかけてきた。



KM と相撲を取る 神峰山寺 1972年 3月

KM 塩野，ここで相撲を取ろう。

塩野 けど，ここは小石がいっぱいあって，危くないか？

KM かまへん，相撲を取ろう！

塩野 よし，やるか！

KM やろう！やろう！！

こうして，広場に円を描いて土俵を作り，土俵の中にあつた石は適当に外に出した。相撲をしてみると，長く療養生活を続けていたKMの体はぶよぶよだった。けれども，押し出されても押し出されても果敢に挑んでくる。それは長い冬に閉じ込められていた大自然の生命が，春に向かって活動を活発にしているのにも似ていた。相撲を取りながら，KMにも春の到来が近い事を感じ，心を動かされるのであつた。

\*

2年次の登録科目は1年次のそれとは大きく変わっていた。基礎演習と経済原論Iを除くと外国語科目・保健体育科目・一般教養科目（人文分野・社会分野・自然分野）といわゆる教養科目が1年次ではほとんど全てを占めていた。それが2年次では教養科目とはほぼ同数の専門科目を履修することになった。なお教養科目も残っていた

が、2年次からは経済学の勉強が中心になったり。

ある英語のクラスでは、Malmud, Bernard. *The Assistant*. をテキストにした。都会の下町にあるユダヤ人商店に勤める主人公の日常生活を描いた作品である。本格的な英語の作品を読むには明らかに語学力が不足していた。それでも、作品の表現している雰囲気や伝えようとしている教師の努力はよく分かった。一般教育科目（人文分野）では心理学を取った。簡易製本による大きく分厚い教科書は、担当教員の著書で分かりやすかった。様々な実験結果を丁寧に紹介してから、帰納的に心理学の法則を説明されたので、授業内容も説得力があった。当時大学長だった山本浩三先生が担当された憲法は、明徳館の大教室で開かれた。大柄な先生は黒板に大きな字で要点だけを書き、学生に対しては真向かいになって堂々と講義された。たとえば、「政治とは権力であります」と核心をズバッと言われた時、政治の本質が単刀直入に語られていると感心した。社会思想史は出口勇蔵『社会思想史』をテキストとした。大学2年生には難解な本であったが、近代の歴史的流れの中に一人ひとりの思想家を置いて説明された。思想というものはそれだけを取り上げて考察するものではなく、様々な歴史的状況の中においてこそ適切に理解できるのだと分かった。演習は2年次の後期からだった。

神学館とクラーク記念館の間の奥まった所にひっそりと2階建の宗教センターがあった。センターの前は3つの建物に囲まれた広場になっていて、キャンパスから広場に入った左手に宗教センターの掲示板が立っていた。1年生の時からこの掲示板に気付き、そこに紹介されている様々な宗教部の活動に興味を持っていた。1972年度の

---

1) 2年次(1972年4月から1973年3月)に読んだ社会科学系統の本は次の通りである。

貝塚茂樹『中国の歴史 上』貝塚茂樹『中国の歴史 中』ホーイヤ, K.C.『リンカーン—その生涯と思想—』貝塚茂樹『中国の歴史 下』岩村三千夫・野原四郎『中国の現代史』『世界歴史Ⅰ 古代1 古代オリエント世界』金沢嘉市『ある小学校校長の回想』ラッセル, フィリップス『ジェファーソン—米国民主制度の創始者—』『世界歴史Ⅱ 古代2 地中海世界2』青山秀夫『マックス・ウェーバー—キリスト教的ヒューマニズムと現代—』『世界歴史30 別巻 現代歴史学の課題』『世界歴史Ⅲ 古代3 地中海世界 南アジア世界の形成』『世界歴史Ⅳ 古代4 東アジア世界の形成1』ベルデン, ジャック『中国は世界をゆるがす 上』ベルデン, ジャック『中国は世界をゆるがす 中』毛沢東『中国革命と中国共産党』矢内原忠雄『マルクス主義とキリスト教』『世界歴史Ⅴ 古代5 東アジア世界の形成2』大塚久雄『信仰と社会科学のあいだ』岡谷元治『近代東洋経済史』出口勇蔵『社会思想史』北野熊喜男『社会経済学史原理』大塚久雄『ヴェーバー社会学における思想と経済』

活動の一つにロイド (Lloyd, G. G.) 教授<sup>2)</sup>による英語での「マルコ福音書の講座」があった。英語に関心があったので「ぜひ聞いてみたい」と思って、第1回目から参加した。宗教センターの建物に入ると、右側で広場に面した部屋が宗教部活動のための集会室だった。中央のテーブルを囲んで椅子が置いてあり、ゆったりと15人くらいは入れる感じだった。5, 6名の学生が集まっていると、ロイド先生が静かに入って来られた。椅子に座られるとこじんまりと見える方だった。1回目のテキストはマルコによる福音書1章1～8節で、洗礼者ヨハネについて記してある。先生はゆっくりとだがしっかりした口調で先ずテキストの1節を読まれ、それから様々な角度から説明された。たとえば「主の道を整える」(3節)に関しては、古代中近東における道・王のために道を整えること・道の持つ宗教的意味について、よどみなく分かりやすい英語で的確に説明された。たった1回参加しただけで、ロイド先生の博識とわずかな学生相手でも丁寧に対応される姿勢に感服した。その後もなるべく先生のマルコ福音書研究には参加するようになった。ところで、宗教センターで出会った先生方によって3年次以降の学生生活は思いもよらぬ方向へ発展することになった。

昨年10月に始めた聖書研究会は引き続き月1回行った。場所は学生会館である。熱心な参加者であった伊藤さんは「聖書研究を続けて下さい」という言葉を残して、春に卒業された。研究会ではヨハネ福音書を続けて学んだ。多くの担当者がバークレーなど分かりやすい註解書で準備した。そんな中大学に残られた池田さんは、ドイツ語でブルトマンの分厚い註解書を読んで発表された。レベルの違いを感じさせる発表であった。

\*

香里教会の教会学校では粟飯原先生と共に高校生会を担当することになった。期待されたのは助手的な役割である。とはいえ女子ばかり10名ほどの中学3年生を担当した前年度は様変わりで、30名を越すメンバーがいた。高校3年生は男子が多く、彼らのほとんどは同志社香里高校の生徒で後輩だった。2年生はほぼ男女同数で、いろいろな高校から来ていた。1年生は昨年までの生徒でほとんど女子だった。

---

2) ロイド (Lloyd, G. G. 1914-1984) アメリカの合同長老教会から派遣された宣教師であった。ヘブル書の研究に業績がある。同志社大学神学部で、新約聖書やギリシャ語原典を担当された。

賑やかに高校生会を始めた5月頃に、雰囲気の違いで高校2年生の男女2人がやってきた。男子生徒は無口でほとんど話さなかったが、女子生徒が彼の分までしゃべっていた。けれども、いくら聞いてもなぜ2人が教会に来たのかはよく分からなかった。ただ女子生徒は小学生の時に教会学校に来ていて、彼女が男子生徒を説得してやって来たといういきさつだけは確かだった。1か月ほど経ち高校生会が終わったある日に、2人から台所へ誘われた。真剣な口調で彼女は言った。

教会だけは私たちのことを分かってくれると思って来た。なのに、教会も分かってくれなかった。

翌週から高校生会に2人の姿はなかった。何か問題を抱えているようだったが、ついに彼らの事情は分からないままだった。教会を信頼し期待されいながら、何の力にもなつてやれなかった。2人には申し訳なかった。

教会学校でこの年最大の出来事は、由良で行う2回目の夏期キャンプになった。昨年のように小学生から高校生会までの参加者全員をバス1台に乗せることは無理だと見込まれた。そこで、小学科キャンプを前半の月曜日から水曜日までの2泊3日で行い、中高科は水曜日から金曜日までの3泊4日で実施することになった。教会学校教師会でこの方針が決まると、中高科の生徒と教師は早速準備を始めた。中高科だけで夏期キャンプを行うのは初めてだったので、誰もイメージできなかった。そこで準備会では自由な話し合いから始め、お互いのアイデアを出しあった。話し合いをリードされたのは粟飯原先生で、高校1年生の女子生徒と3年生の男子生徒は積極的に加わっていた。協議の結果、配膳を受け持っていた班の役割を広げ、ゲーム・タイムキーパー・裁判所等の担当も兼ねることにした。こうして、新たな役割を担う各班の自主的で積極的な活動によって、充実した中高生らしいキャンプにしようと相談した。その上で、遊び心を加味して由良村5戒<sup>3)</sup>を作った。

\*

---

3) 1972年度夏期キャンプの由良村5戒は次の通りである。

- 一 礼拝はしゃべるな、ねむるな、前を見ろ。
- 二 プログラム、わすれず、おくれず、なまけるな。
- 三 先生をうやまい、よくきき、ついていけ。
- 四 女子の部屋、のぞくな、入るな、からかうな。
- 五 うそつきと無断外出、地獄行き。

教会漬けの夏休みが始まった。この年の夏期キャンプは小学科が8月10日～12日、中高科が12日～15日に行われた。夏休みに入ってから日程的には余裕があると思われた。ところが、教会学校教師2年目の大学2年生にはキャンプ準備の作業とその依頼が次々と舞い込んできた。中高科キャンプの準備に関しては、班分け作業・葉づくり・由良村5戒やプログラムの模造紙への筆記などを、有志と教会に集まって相談しながら行った。教師の仕事であるメッセージ作成と分級の教案準備には時間をかけた。その上、まかないの責任者であった安原富さんから思いもかけない依頼がきた。ある日、小学科と中高科のメニューとそれに必要な食材を書いたメモがある女性教師に渡された。それぞれに60名前後の参加者であるから、食材も相当量がある。メモにはそれらを事前に香里で買っておく物と、現地で調達する分とに区別して書いてあった。そして、事前の買い物は若手の教師に一任した上で、「塩野さんも買物を手伝って、バスですぐに運べるようにしておいてね」と言われた。数名で買い物に行き、食材を分類してバスで運べるように段ボールに詰め込む作業には1日かかった。

夏期キャンプには小学科のプログラムから参加した。対象が小学生に限定されると、プログラムにもそれに対応した創意工夫がみられた。たとえば、紙芝居風の聖書物語である。一つひとつの場面を模造紙に描いて小学生に語りかけていく。みんな夢中になって聴いていた。礼拝での説教も分かりやすい子供向けの話し方で、高校生会の教師には新鮮だった。小学科のキャンプが終わり中高生を迎えた時は、これからの4日間にわくわくした。テキパキと会場準備を終えると、午後は自由時間でほとんどの中高生が海へ行った。海に着くと粟飯原先生のアイデアで20メートル程の所に2つのポールを浮かべ、ロープで遊泳区域を設定した。少し沖に出ると由良川からの流れがあって、危険だったからである。事前にかかなりの打ち合わせをしていたらしく、タイムキーパーとゲーム担当の班はキャンプを盛り上げてくれた。夕食の後には裁判が行われた。裁判所の配慮からだろう。中高生で訴えられた人はなく、被告にされたのは青年会で参加していた人たちだった。検察側と弁護側からそれぞれに主張があり、裁判長は「飛び込み台からの飛び込み10回」とか「砂埋め」の刑を宣告していた。

夏期キャンプを終えても、高校生会の熱気は持続していた。それで夏休み中に新たに2つのプログラムを計画した。教会での聖書研究会の実施と枚方パークにあるファミリープールへ出かける企画である。いずれも盛会だった。





浜辺での集合写真



由良村五戒

なお、青年会も夏の修養会を乙訓郡大山崎町にある水上隣保館で行ったので、参加した。隣保館は親切に対応して下さった。使わせてもらったのも新しい施設で、気持ちよかった。水上隣保館の教会青年に対する期待を感じさせられる修養会だった。

(2)

2年生の後期に入り、待望の鳥ゼミナールが始まった。ゼミ生は男ばかり27名で、それぞれに個性と持ち味を備えていた<sup>4)</sup>。経済学部の学生が広範な地域から集まっていることは、高校との違いとして何となく感じていた。それをはっきりと認識させられたのが鳥ゼミだった。出身高校を府県別にして27名のゼミ生を分類すると、次の通りである。

石川 県	東 正仁・大西 寿郎・末友 清隆
滋賀 県	岡崎 直明・大西 冬樹
京都 府	家長 隆・村田 辰男・四方 久幸・安福 英則・寺内 弘
兵庫 県	本庄 秀雄
愛知 県	太田 泰之
奈良 県	今西 秀次・高田三喜雄

---

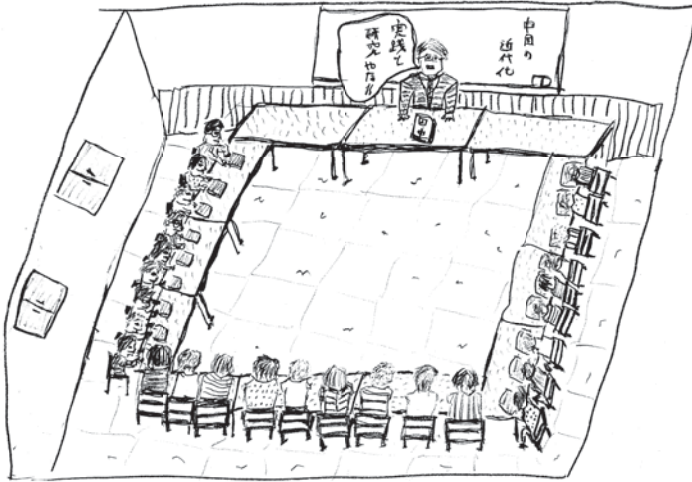
4) 鳥ゼミ7期生について記念誌では次のように紹介している。

第7期生は27名という大所帯でした。それは1972年に日中国交回復が行われ、にわかには中国ブームが起こったために、ゼミ希望者が70名を超えるという超人気ゼミになったためです。それだけに多士済々の人材がいました。

今思い起こしても、勉強ばかりしていた家長君、性書ならぬ聖書を読みふけていた塩野君、コンパになれば同志社小唄で座を賑わしてくれた高田君、兄貴のような存在であった片山君など、ほんとうに面白いゼミであったと思います。(中嶋慎治)

(鳥) この年日中国交回復をうけて、1次募集に70余名が殺到。その中からえりすぐった精鋭によるゼミの議論はすごく活発で時間延長もしばしば。課外活動もよくまとまり、合ハイ、ゼミ通信「バンダ」発行、旅行(山陰)、卒業文集など多彩。コンパでの熱っぽい「鳥ゼミ小唄」の調べが今でも耳に焼きついています。そんな雰囲気なかで、夏・冬のゼミ合宿も久々に復活。最後まで青年らしい熱気にあふれた、印象に残るクラスでした。

『開講30周年・鳥先生還暦記念 同志社大学 経済学部 鳥ゼミ寒梅会記念誌』  
28頁



島一郎ゼミ 1972年10月

大阪府 石井 義久・長岡 豊・中島 宏・大西 雄三・塩野 和夫・  
矢野 満・片山 隆夫  
和歌山県 中嶋 慎治  
広島県 佐々木博司  
大分県 林 清史郎  
福岡県 大倉 祐美  
熊本県 太田 勝・高森 毅

第1回目のゼミでは自己紹介が行われた。27名が順々に黒板の前に立ち、数分で簡潔に紹介するのである。みんなは出身高校や島ゼミでの抱負などを語っていた。そんな中で、一風変わった自己紹介をした。

塩野和夫です。聖書には地の「塩」の味の大切さ、「野」の花の美しさ、平「和」を作りだす大切さ、そして良き「夫」とはどういう人間なのかを書いてあります。名前に恥じない人間になりたいと願っています。

キリスト教徒であることを宣言した自己紹介に、折に触れて応えて下さったのは島一郎 (1937-2009) 先生である。先生はかつて教会に通っておられた当時に懐かしむようにして言われた。

塩野！私も若い頃は四條烏丸にあった教会に通っていた。もう少しで洗礼を受けようかというところまで来ていた。ところが、その時にマルクス主義と出会った。それで、ずいぶん悩んだ末に科学的方法で社会を改革していく立場に転向した。そういうわけでキリスト教を貫けなかったが、塩野君にはキリスト教を一貫してもらいたいと思う。がんばってくれ！

ある時はキリスト教の大衆化路線ということを言われて、「主、我を愛す」の替え歌を歌って下さった。

塩野！キリスト教もこれからは大衆化路線を行かなあかん。大衆化路線というのは、こういう事や。

エスさん わてらを愛したはるんや  
エスさん しっかりしたはるさかい  
わてらがなんば 弱くても  
怖いこと あらへん  
わてらの エスさん  
わてらの エスさん  
わてらの エスさん  
わてらを 愛したはるんや

ところで、全員が自己紹介を終えてから幹事を2人選んだ。なぜか、同志社高校出身の家長隆君と同志社香里高校出身の私を選ばれた。

\*

10月に入っても間もない日曜日であった。高校生会を終えた部屋には数名が残っていた。すると言おうか言うまいか躊躇する様子で、高校3年生のKZが「塩野さんに

言っておいた方がいいと思うことがあるんです」と声をかけてきた。「他の人に聞かれるとまずい」ということなので、みんなにはしばらく席を外してもらった。

KZ 塩野さんに言った方がいいのか、言わない方がいいのか、今でも迷っています。

塩野 何のことか分からないが、よかったら聞かせてくれへんか。

KZ 高校1年生の連中のことです。

塩野 彼女たちが何か迷惑でもかけたのかな。

KZ 高校生会の中でも塩野さんは1年生のこと、大切に思たはるでしょ。

塩野 去年から彼女たちの分級を担当してたからな。

KZ 連中の表の顔と裏の顔の違いを、塩野さん知ったはりますか？

塩野 表の顔と裏の顔って、何のことかな。

KZ 塩野さんに向かって言ってることと、陰で言ってることです。

塩野 陰で言ってることって、どんなことかな？

KZ 連中、表では塩野さんに合わせていい子にしています。けれども、陰では塩野さんのこと、笑い物にしてるんです。塩野さんが気の毒で、それで伝えておこうと思ったんです。

話が終わると、平気を装ってKZには「よく話してくれた。ありがとう」と言って別れた。高校生会を担当した時、前年度受け持っていた中学3年生は高校1年生になっていた。すでに1年間分級を一緒にしていたので、彼女たちとは気心の知れた仲のはずだった。ところが、何か様子が違うのである。しかし、その「何か」は知りようもなかった。そんな時、KZは「連中は……陰では塩野さんのこと笑い物にしてるんです」と教えてくれた。「そういうことだったのか」と合点がいった。そして何事もなかったかのように教会を後にした。

翌日、いつものように枚方市駅南口近くにある店でパンを求め、橋の下のおっちゃんに「パンを置いときますよ」と声をかけて、大学に向かった。クラスにもいつものように出席したが、明らかに何かが違う。何をしても心が空洞で、思いは別のところにあった。思い出したくもないのに、繰り返し「塩野さんのこと笑い物にしてるんです」と聞こえてくる。一途に教会学校の教師を務めてきた者に、あの言葉は受け止め

ようないほどの大きな衝撃だった。自分で自分が分からなくなっていた。分かったことは「こんな状態では何をしてもちゃんとできない」ことだけだった。クラスを終えると、無意識のうちに京都駅に向かっていた。自宅の母親には「友達の下宿に泊ることになった。また、連絡するから」と電話した。

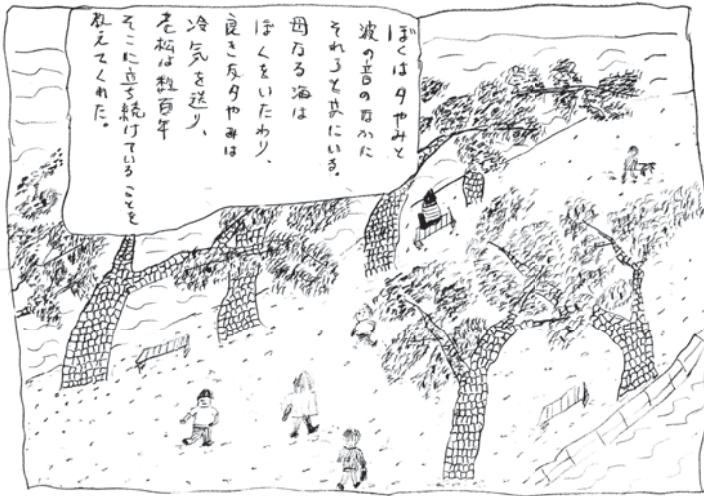
入場券を買って駅構内に入った。いろんな列車がプラットフォームに入って停車しては発車していく。そんな中で旧式でかなり使い古されていると思われる列車が停車していた。山陰線だったと思う。なぜかその列車がああ時の気持ちにびったりときたので乗車した。「天橋立」行きだった。車内で天橋立まで切符を求める。車窓から過ぎゆく風景をただただぼんやりと眺めていた。心の痛手の深さは知りようもなかった。終着駅に着くと、まっすぐに天橋立に向かう。間もなく夕暮時となり、辺りは次第に暗くなっていった。そんな時間帯に1時間も2時間も変化していく風景だけを眺めていた。すっかり暗くなると、近くにあった民宿に投宿する。一泊二食付きで2000円だった。部屋に入ると、すぐに天橋立で心によぎっていた思いをそのままにノートに書きとめた<sup>5)</sup>。

ぼくは夕やみと波の音のなかに  
それらと共にいる。  
母なる海はぼくをいたわり、  
良き友夕やみは冷気を送り、  
老松は数百年そこに立ち続けていることを教えてくれた。  
ああ、ぼくはその中でそれらと共に  
しかし、ぼくとして生きているんだった。

2000円払うと、もう一泊するお金は残っていなかった。けれども、まだ日常生活に戻れる状態ではない。電話帳を繰ると、近くに丹後宮津教会があった。「これから訪ねてもよろしいでしょうか」と電話すると、「どうぞ、おいで下さい」と千葉昌邦牧師は応えて下さった。まっすぐに教会に向かう。丹後宮津教会に着いたのは朝の10時頃だった。なぜか素直に心の葛藤をあるがままに千葉牧師には打ち明けることができ

---

5) 参照、「天の橋立で」(『一人の人間に』18-19頁)



天の橋立にて 1972年10月

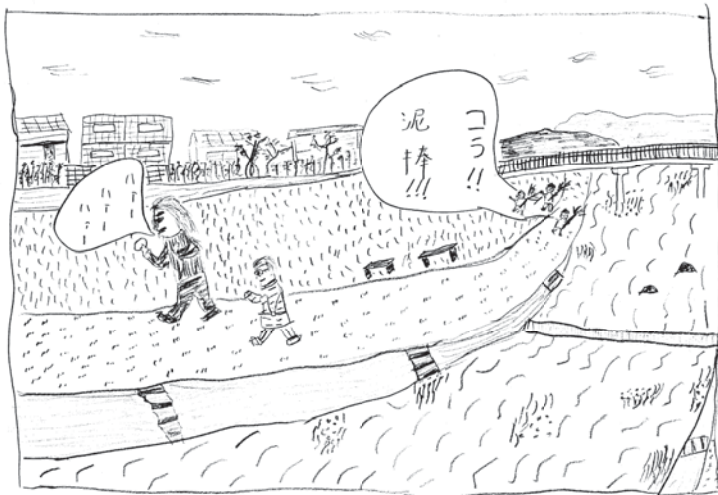
た。全てを聞き終わると、牧師は千葉和子夫人に「母さん、昼のお弁当を2つ作って  
くれないか」と頼まれた。そしてお弁当2つだけを持って車で川の上流へ行き、言わ  
れるままに石を拾った。教会に帰ると、いろいろな写真を次々と見せては説明して下  
さった。それはまさに悩める者に対する配慮のこもった牧会である。悩みそのもの  
には触れないで、しかし彼の心に寄り添い落ち着くべきところに落ち着くのを待つて下  
さったのである。当り前の心を取り戻した私は千葉昌邦牧師と千葉和子さんに別れを  
告げて、午後3時過ぎには京都行きの列車に乗った。

\*

10月も下旬に入って、秋晴れの気持ち良い朝である。いつものように二条大橋の下  
で待っていたおっちゃんに「置いときますよ」と声をかけて、パンを届けた。受け  
取ったパンを大切に片づけてから、彼は立ち上がり歩き始めた。少し距離を開け  
ながら二人は荒神橋近くのお地藏さんを目指した。

塩野 今日には本当にいいお天気ですね。

おっちゃん うん。



おっちゃん 走る! 逃げる!!

塩野 今日良いことがあるといいですね。

おっちゃん うん。

お地藏さんの所に来ると、私は大学へ向かった。おっちゃんはお地藏さんの前で手を合わせ、しばらく祈っていた。実は以前から気付いていたことがある。祈り終わると彼はお地藏さんの前を物色するのである。そして、お饅頭やおむすびなどのお供えがあると、周辺を見渡してからそれを手にする。いわゆる採集経済である。おそらくそれから市内の何か所かを、食事を拾いに歩き回るのであろう。その日も良いお供えがあったらしい。彼が伸ばした手に何かを持った、まさにその瞬間である。「こら! 泥棒!!」という大きな叫び声が少し上流から聞こえてきた。見ると、竹ぼうきを振り上げた4、5人のおばちゃんがにらんでいる。河原の掃除をしているおばちゃんたちだ。驚きあわてたおっちゃんは下流の方に川淵の道を走り始める。その時、なぜか私もおっちゃんと並んで走り始めた。逃げる時も彼はすり足だ。息をはあはあとさせながら、恐ろしそうな表情で逃げている。あんな顔つきのおっちゃんは見ることがない。いや想像したこともなかった。ようやく二条大橋の下に着いて上流を見ると、おばちゃんたちの姿はなかった。「慣れるとこういう生活も楽しいものや」という言葉を



文字通りに受け止めていた。だから、採集経済でもそれなりにのんびりと暮しているものだとばかり思っていた。しかし、彼にも恐ろしい存在があった。鴨川の河原の掃除を仕事にしていたおばちゃんたちである。橋の下の掃除も彼女たちの職務であったに違いない。だから、そこで生活されたのでは仕事が出来ない。上司からも何か言われていたのではないだろうか。そうだとすると、おっちゃんとおばちゃんたちの間には日常的にもめごとがあったとしても不思議ではない。その日、午前中の授業には出席できなかった。

\*

宗教センターで開かれていたロイド先生の講座には後期も出席を続けた。参加者は毎回数名だったが、集会に通ううちに何名もの先生方と知り合うことになる。まず、センターの主任であった千葉宣義先生である。先生とは前期から挨拶を交わしていた。後期になると、センターで開講されていた千葉先生の福音書講義にも時々出席した。ロイド先生がマルコ福音書を重厚に、しかも分かりやすい英語で講義されていたのとは対照的だった。千葉先生は繊細で細かな点に着目し、社会問題にも言及しながらラディカルに解釈された。宗教センター主任の河崎洋子先生・工藤弘志先生とも挨拶を交わすようになった。神学部の遠藤彰先生は親しく話しかけて下さった。あの頃、先生は宗教センターの責任者であられたと思う。センターの2階には遠藤先生の部屋があった。遠藤先生からは顧問をされていた同志社グリーの活動や専門にされていた新約聖書神学について伺った。2階の部屋にはリードオルガンがあって、演奏を聴かせていただいたこともある。椅子に座られると背筋を真直ぐに伸ばされて、一心にオルガンに向かわれた。先生の誠実な人柄がにじみ出ているような演奏だった。神学館の4階で階段を登った所に、深田未来生先生の研究室はあった。先生の研究室はいつもオープンで、誰かがいた。きっかけを思い出せないのだが、2年生の後期には深田先生の研究室に出入りする一人となっていた。ロイド先生の聖書講義出席をきっかけにして、神学部や宗教センターの先生方と親しく話し合える環境に恵まれ、キリスト教神学が急速に身近な存在となっていた。ところで、11月14日午後1時に明徳館前で行われた秦孝治郎理事長と学友会との大衆団交を遠くから見ていた。団交が始まるとすぐに一人の学生が理事長にコートを掛ける場面も目にした<sup>9)</sup>。

(3)

あわただしく過ぎたクリスマス諸行事を終え、静かな環境で新年を迎えた。その時、着実に回復していたKM、パンを届けていた橋の下のおっちゃん、高校生会のメンバーのことなどが思われた。経済学では近代経済学の理論による経済分析よりも、人間と社会の課題に対する経済学的観点からの検討に興味は移っていた。島ゼミの影響である。さらに、キリスト教神学への関心が急速に広がり始めていた。先生方との話し合いによって学問的な輪郭を描くことはできた。ただし、この関心はただ学問的な取り組みに留まらず、実存的な特色を強く帯びていた。しかし、まさにここに深まり行く悩みの原因があった。聖書によると、「神の召命」なくして救いに関わる神学の研究に取りくむことは、神に対する越権行為となるからである。たとえば、エレミヤ書第14章14節には次のようにある。

主はわたしに言われた。

「預言者たちは、わたしの名において偽りの預言をしている。わたしは彼らを遣わしてはいない。彼らを任命したことも、彼らに言葉を託したこともない。彼らは偽りの幻、むなしい呪術、欺く心によってお前たちに預言しているのだ。」

どんなに考えても、「神の召命」を聞いたことはない。だから、自らの希望を根拠にキリスト教神学を学ぶとすれば、それは偽りの預言者と同じ立場となる。

\*

1月23日は新島襄の召天記念日で、11月29日と共に毎年墓前で同志社関係者による早天祈祷会が開かれている。しかし、1973年のこの日は関係者が集う時間帯を避けて、ただ一人若王寺山に登った。キリスト教神学をめぐる個人的な希望と「神の召命」をめぐる問題で収拾がつかなくなっていたからである。つまり、一方ではキリスト教神学それも人間の救いに関わる研究に本格的に打ち込みたいという希望があった。他方で、聖書によると「神の召命」なくして己の希望で取り組むキリスト教研究は「偽預言者」の行為として厳しく戒められていた。

---

6) 参照、『同志社百年史 通史編2』1357-58頁。



新島襄之墓（若王寺山）

このジレンマに陥った者にそれを吐露できる場所としてどこよりも考えることのできた場所、それが新島先生の墓前であった。かつて若い日の情熱を傾けた柔道の練習における黙想の時に、いつも新島先生に呼びかけ、先生の言葉を聴き、それによって自らを鼓舞していた。そのためにいつしか新島先生との対話は身に付いていた。だから、きわめて当然の判断として1月23日の昼には一人で若王寺山に登り、新島襄の墓前に深く頭を垂れた。5分10分と黙想の時は経過した。静かに時は流れていく。その間、何も聞こえてはこなかった。しかし、あれほど悶着に苦しんでいた心が、不思議と静まっている。何の解決も見いだせていないのに、なぜかとても落ち着いていった。

墓前に立ち始めて30分ほどが過ぎた頃に、新島先生の墓の奥の方からバサッ！バサッ！と音がしてきた。「何の音か？」と思わず注視していると、茂みをかき分けて1人の外国人青年が現れてきた。彼はアメリカ人でポップと言った。しばらくポップと話してあって、予想もしなかったアイデアが思い浮かんできた。

そうだ、ジェフがいた。彼ならばこのジレンマについて聞いた上で、何か彼の考えを話してくれるに違いない。この夏にもジェフに会いにアメリカへ行く。

若王寺山に登る時には、春以降の見通しが立たず不安な心を抱えていた。ところが、心の落ち着きを得た上にアメリカ行きの計画まで抱いて山を下ったのである。

\*

この夏にアメリカへ行くとなると、先ず必要なものは資金である。たまたまある建設会社の社長家族と以前から家族ぐるみの付き合いをしていた。偶然社長と会った時にそれとなく聞いてみると、春休みの1か月間アルバイトとして働かせてもらえることになった。1日のアルバイト料は2,400円である。2月中旬には春休みに入ったので、自宅から毎朝自転車で国道1号線沿いにある建設会社まで通った。7時30分より少し前に着くと、会社にはすでに女子事務員がいて彼女からその日に乗る車と仕事内容、それと運び込む仕事道具について指示を受けた。準備が整うと8人は乗れるボックス車で、ある場所を経由して、作業現場へ向かった。ただし、会社で車に乗ったのは運転手と助手席に座るアルバイト学生の2人である。運転手は多くの場合建設会社の社員で、20歳代後半で話し好きな青年だった。彼が向かう作業現場では殆ど基礎工事をしていて、穴を掘ったり枠組みにコンクリートを流し込んだりした。他の運転手には大工さんの場合や、左官屋さんの日もあった。

途中に立ち寄ったのは、かつて都丘町の街外れにあった教会跡を含む一帯にあった。そこには、大きな2階建のバラック一棟とその周辺にいくつかの建物があって、「飯場」と呼ばれていた。飯場には20～30人の男性労働者が生活していたと思う。その入口に着くと、運転手がそこにいた人に「今日は3人」とか、「今日は4人」と大きな声をかける。すると、言われただけの労働者が弁当箱と水筒だけを手にして車に乗り込んできて、作業現場へと向かうのであった。基礎工事の現場などでは、飯場のおっちゃんと同じ立場で仕事をした。もちろん、彼らは仕事について熟知していたので、いつものように仕事のコツを教えてくれた。昼時に一緒に弁当箱を開けたのは彼らとであった。昼3時の休憩時間もたいてい彼らと過ごした。どういうわけか、何人かの労働者とは度々仕事と一緒にあった。それで、数人のおっちゃんとは打ち解けて話すようになっていた。

細身の体つきで周囲を気にして落ち着きのないように見えるある人からは、こういう話を聞いた。

俺はな、名古屋にある会社に勤めていたんや。ところが、競馬ですってしまい会社の金を使い込んでしまった。それがばれて会社には居れんようになった。それでここに来たんや。けどな、もう1回俺が金を手にして競馬をさせてもろうたら、今度は絶対に負けへんで。勝つコツが分かったからや！

がっしりした体つきで落ち着いて話す男性からは、こんな話を聞いた。

飯場にいる者で、本名を名乗っているのは半分もおらへん。みんないろいろあって、ここへ来たからや。俺もな、行く所がなくて大阪駅でうろろうしていた時に、ここのお兄ちゃんに誘われて来たんや。

そんなある日のことである。3月10日を越え、アルバイトもあと数日となっていた。何回も一緒に仕事をしていたので、すっかり親しくなっていた40歳代の男性がいた。彼は背が高くしっかした体つきで面長な顔をしていた。このおっちゃんとはとりわけ親切で、仕事でも丁寧に教えてくれていた。たまたまその日は彼と二人で昼食を採っていた。その時に聞かれたのである。

お兄ちゃんは大学生や。大学を卒業したら、どんなことをしようと考えているんや？

それは思いがけない質問だった。ところが、その時になぜかとても素直になっていて、気がつく心にある思いをそのままに打ち明けていた。

僕は今、経済学を学んでいます。けれども、いろいろな人を見ていると、その人たちが救われて人間らしく生きることができるように、そのための勉強を大学出てもっとしたいと思っているんですけども……!?



### 私を押し出した言葉

すると、間をおかずに彼はこのように応えてくれた。

そら、そうやろな！  
僕らのためにもがんばってえな！  
応援してるで！！

あの時、おっちゃんがなぜあんなことを聞かれたのか。それに対して、なぜ誰にも話さなかった心にある思いを、あのように正直に打ち明けたのかは分からない。しかし、確かなことが一つだけある。それは「そら、そうやろな！僕らのためにも頑張るってえな！」という言葉、期待を込めた彼の言葉にはものすごい力があって、あのジレンマを乗り越えてキリスト教神学へ向かうようにと強く後押ししていた真実である。あの言葉でアメリカへ行く必要は無くなっていた<sup>7)</sup>。

\*

3月下旬に入って、奈良県御所市にある吐田郷伝道所で教会学校の春キャンプを

---

7) 「そら、そうやろな」(『一人の人間に』26-28頁)



1973年春の教会学校キャンプ 吐田郷伝道所

行った。この時は小学校4年生から高校生会までの生徒を対象にした。それに教会学校の教師と青年会からの参加者を入れると、70名を越えた。吐田郷伝道所には附属の恵愛保育所がある。それで、保育所の園舎が集会場兼食堂となり、園庭は自由時間の遊び場になった。

吐田郷伝道所の米田純三（こめだよしみ）牧師は障害のため、背が低かった。開会礼拝で挨拶をされた米田牧師は御自身を「吐田郷のザアカイさん」と紹介して言われた。

障害があるために引け目を感じていた私は、人目を避けて引き籠っていました。ところが、ザアカイさんを探し求められたイエス・キリストと出会って、救われたのです。それから、いろいろ苦労を重ねて牧師になりました。また、ザアカイさんが捧げたように、私も自分の家を捧げて教会を建てました。それがこの吐田郷伝道所です。

ところで、春キャンプから実質的にスタートしたグループがある。ヨルダン会である。問題を提起したのはこの春に高校生会を卒業するメンバーで、それは4月以降の教会における彼らの立場についてであった。これまでは高校生会を終えると自動的に

青年会に入会していた。ところが、彼らは主張した。「青年会の人たちと自分たちはあまりにも違いすぎる。だから、青年会の人たちと自分たちが一緒になって活動することはできない」。確かに、青年会員の多くは信仰を告白していたし、そうでなくても自立して参加していた。それに対して高校生会では、学年ごとに10名ほどのメンバーがグループになって活動していた。このギャップに向けた問題提起をどのように受けとめればよいのか。半年ほどの間に様々に考えられ話し合われた結果が、高校生会から青年会への間に位置するヨルダン会の設立である。

ヨルダン会は実質的にこの春キャンプで発足した。来る4月に高校を卒業する者、1歳年上で高校生会の先輩、それに2年先輩の者までを含めて、約20名で1973年4月からヨルダン会は活動を開始した。